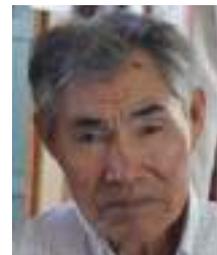


長崎 毅 ながさき つよし (伊良部漁協)

1930年(昭和5年)、宮古島伊良部町に生まれる。83歳(2013年時)。

池間の分村伊良部は、共に池間海洋民族と尊称され、誇り高きウミウチュ(海人)である。この勇壮闊達な気風を継いだ氏も、3.5トンの愛船・豊丸を拵えて、波濤高き尖閣海域へ出漁すれば、常に魚は満載、大漁だったという。氏が、尖閣に行ったのは日本復帰前の1964年から68年の約5年間、当時は「魚積みに行った」「カジキ突船2,30艘来ていた」「長崎巻網船が操業」「上陸して廻ったから島は全部知っている」等々と、氏の話は興味深く示唆に富む。



3.5トンの豊丸 尖閣へ 魚積みに行った

(船の写真と賞状を出して見せながら)、ほんと、この船は小さいがよく働いてくれたねえ。

3.5トですよ！、こんな船で尖閣行くのは皆が冒険だと言っていたが、沖縄県でこれ(水揚げ高一等賞状)をとることが出来たもん。この豊丸は小さい船だが、尖閣行く目的で造ったから、17馬力で(笑い)。大体14、5時間かかったねえ。クバシマ(魚釣島)にはトローリング、曳き縄で行った。時々底魚の一本釣する位でねえ。もう、あっちには魚釣りにじゃなくて、魚積みに行ったんだよ(笑い)。昔は、それ位おったんだ。もう一日で満杯、と言っても、船は小さいが、3.5トンの小型船で初めてやったのは僕だもの、ここ(伊良部)では。



琉球政府主催、宮古地区産業振興共進会で多量漁獲部で一等賞もらう。(1967年6月)

当時は魚はすごかったねえ、面白く釣れた。シケが続いてこれがナギるとすぐ出たもんねえ。月には6航海、7、8航海やることもあった。1航海は今日夕方出たら、明日は釣って、明後日は入る。今日到着いたらもう12時お昼前には釣ってあるから。

あの時は、尖閣には、魚を釣りに行くんじゃない、魚積みに行ったもん、ほんと(笑い)。

僕が行ったのは復帰前でした。昭和39年(1964年)から43年(1968年)までかねえ。そのあとは南方カツオ漁に行ったから。いや一あの頃は、大変魚がおったから、ほんと。

もう僕の水揚げを見て、もう皆びっくりしていた。今日水揚げして、また明後日もだからねえ、(笑い)。だが、あれほど釣れた魚が、今はもうそんなに釣れないと言うから。魚は減ってもいるだろうけど、中国なんかが必要で騒いでいるから、もう魚も驚いて来ないんじゃないか(笑い)。

シマガツオ クバシマだけで 満載

アカオ(赤尾嶼、大正島)へ行かず、直接、尖閣に行きました。当時はねえ、クバシマ(魚釣島)は魚の獲れる島だったから、ここで満載するんだ、いっぱい。そこで魚が獲れなくなっ

てからあっちこっち廻ったんだけどねえ、最初はクバシマだけで十分ですから。

あまり釣れない場合は、あっちこちの島に渡る。曳き縄は島の周囲を廻る、瀬の部分、いわば瀬に付いた魚ですから、シマガツオ(スマガツオ、ヤイト)というのは島の周囲にしかないから、そういう名前が付いているでしょう。今は漢那浩一さんらが行ってるがそれほど釣れない、当時はすごかったねえ。

あの浩一さんの親父と、あの喜翁(きおう)丸とは一緒にやったもん。僕が何回も行ってたから、また豊丸を造った與儀さんねえ、あの人のキク丸も連れて行った。

当時の人は殆ど残っていないですねえ、進漁丸の武富金一さんも。

尖閣行って曳き縄ではスマガツオを釣るのは冬の時期ですよ。10月から2月頃までねえ。今は12月からですが、僕らが始めた当時は早い時期には10月から出たんですね。僕は向こうの天候と状況は殆んど分かっている。何回も行ってたから。

当時はねえ、魚はすごかったですよ。ほんとに、今日到着いたらもう12時前には釣ってあるから、もう行って休んで、帰る準備だもん。ああ、それだけ魚が獲れたからねえ。

尖閣行く計画で 船 工夫して造る

若い頃本土の方に何遍も行ったことがあったもんで、紀州とか、宮崎とかの漁師がトロール(曳き縄)やっているのを見ておったから、これを宮古でやったらよう釣れた。どっさり釣れる場合もあるから、よしや！船造って、尖閣に行ってみようと思ったわけですよ。

カツオ船は時々行ってはいるんだけど、5ト未満で誰も行ったことがない。3.5トの船で魚が釣れるかどうか分からない。考えて見れば冒険ですよ、未だ小さい船で誰も行ったことがないから。船も自分で工夫して設計して造らしたねえ。今の人なら考えられないですよ、燃料タンクも、エンジンも、船も小さいからねえ、艫の方に、中のセイム積む後ろの方に、長くしてねえ。水缶、ケイコウカン、ドラム缶1本で200リッターですから、これだけの燃料を積めるように、エンジンも当時のクボタの17馬力だったもんだから、ケイコウカンを横に並べてねえ、ドラム缶1本入れてねえ。また魚槽はできるだけ広くして、皆自分で設計してやったもん。船は平良の與儀造船でねえ。材料も普通の丸太を横に切ってやった、これも注文して買ってねえ、沖縄から造船所の方が注文しているから。これで約1ヶ月以上かかったかなあ、船造るのに。尖閣へ行く計画で造ったもん。



豊丸(3.5ト)、尖閣で曳き縄を目的に拵えた。
1週間に2航海し、出漁の度に満船大漁した

この時は曳き縄でカツオが目当てだった。スマガツオから、ホンガツオから、ハガツオから、最初の計画からこれだったもん。これを計画にして造った。だけど何航海か行ったらね

え、ああ、やっぱり船が小さいなあと思ったねえ。

初航海 クバシマで シマガツオ大漁

船ができて、小さい船だから船員は探せないさあ。皆怖がっているんだから(笑い)。

が、10日位して、僕の従兄弟が台湾帰り、この人をお願いして、もう2人おるから行く準備していたら、あと1人若いのが来たわけだ。自分も行きたいと、よしOK、3人でOKしてねえ。最初はアカオへ行った、向こうが近いから、行って見たら魚がない。今度はクバシマ、今でいう魚釣島に行くことにした。アカオで12時頃まで夜釣りしてねえ、向こうには朝7時か8時頃に着く計算して、行って朝8時頃に着いたらねえ、面白い位釣れたよ、魚が、ああ、やった！と。曳き縄で、星が3つか6つあるシマガツオをねえ、向こうはカツオの種類は多かった。ホンガツオとか、ハガツオとか、カツオに歯があるんですよ。今の奴と3種類おったわけですよ。今はそんなものは見ないけどねえ。

もう、ほんとにほしいまま魚が釣れたんだ。いやというほどだよ。これ何航海かしてからねえ、もうこんな小さい船が大漁してるもんだから、皆行きたいんだよ。

当時はここに下ろさんで、平良の方に、氷は向こうにあったから、朝行って向こうで水揚げして、すぐまた氷積んで、まあ帰ってきて時間を見計らって、また夕方出港するからねえ、だからもう1週間には2航海はする。2航海とも大漁だよ。

大シケ ダンブルに釘打ち 水中走る

僕が大漁しているのを皆見ているからねえ、これ尖閣へ行きたいんだよ、行きたいんだけど怖い(笑い)。しかし、なかなか行けるもんじゃない。この船は、ほんとによく働いたですよ、シケにはねえ、もうこれ中に入ることは出来ても、外で舵を掴まえないといかんからねえ、もう波はすぐ上のデッキを洗ったもん。だから波乗りするから向こうは見えないさあ、波はこうなっているから、3名では皆雨合羽着けて、後ろの方で並んで坐っているわけだ、ここは皆デッキのダンブルの蓋は皆釘打って、もう僕らはこれで(艀に)坐っている。艀の方では、舵1人は上の方で座っているんだ。裸だし、もう何も皆釘打ってあるから上から波が来ても飛ぶものはないから、(笑い)。だから、坐っていてねえ、船を掴まえておけばよい、デッキの上まで水がこんなに来たもんねえ。いわば水中で走っているようなもんで(笑い)、冒険だから、皆が怖がってねえ、辞める人がおったんだ、何人も。でも当時はねえ、魚はすごかった、食い付きも全然いいから、満船ですよ、それだから、もうシケにこういうことがあっても、何航海もやって来たわけだ(笑い)。

危険な目 何回も 一度は遭難

豊丸の船籍番号はIR-95ねえ、IRは伊良部のIR、今の人だったらこの船見たら怖がるよお、アンテナも、レーダーもない(笑い)、もう裸の船で、よう尖閣まで行ったなあ。もう危険な目にはいっぱい遭ってきた。危険といっても、風とか、うねりによっては島

を真っ直ぐにして走ることはできんから、どんどん落としながら、多良間の水納島か、石垣の平久保の灯台、これを見てねえ、どんどん下げていくわけだ。夜が明けたら廻ってきて、水納島で錨下ろして休んでから島に渡って来るとか、こういうことを何回もやってきたわけよ。ほんとに冒険だった。若いからこそやれたようなもん(笑い)。

もう昔は、羅針盤1つと海図で、また羅針は新しく買ってきても船に乗せたら磁差というのがあるさあ、この磁差の測定が分からなければ大変だよ、だから磁差は大体勘で補正する、実際はその測り方があるんだがねえ。これもあとで分かったわけだ。70マイル位だったらコンパスでも出来る、距離が近いから。100マイル、200マイルといったらそうはいかん。

シケの時とか、何かの時には、コースからはずれる場合がようあった。何遍も怖い目に遭ってきた。一度遭難して新聞に載ったことがありますよ。そうそう、これがあの時の記事(「不明の漁船員救助」琉球新報 1967.10.24)だねえ。あの時は僕は行かなかったんだよ。で、彼等は自分らだけで行ってくるから休んでおきなさいと、ああそうですか、それはよかった、頑張っただけと(笑い)。そして行かしたわけよ。そしたらシケで遭難してねえ、4名全員助かったからよかった。(※末尾に遭難記事掲載)

カジキ突き 漁期 20~30 艘 来ていた

僕が行った最初の頃は、突き船の時期には 20 腹から 30 腹は来ていたねえ、あっちこっちから。台湾の突船は殆んど花蓮港の船だった、キールン(基隆)からも来ておったけど。

殆んどここ(伊良部)の人が乗っていた。船長、機関長は、殆んど伊良部の人だった。何人もいたもん。僕の兄貴も台湾にいたから。で、僕が台湾に行く時も皆集まってきて飲みに行ったりねえ、この連中が今はもう皆亡くなっているがねえ。

とにかく、カジキ突きの時期には、突船はいっぱい来ておったですよ。20 腹から 30 腹もねえ。それだけ当時はカジキが獲れたもん。魚釣島から大概 2,3 時間走れば殆んどサバやら、何やら、皆湧いていたから。それにカジキが付いている、エサがおるからすごかったですよ。だから朝、突き船はずっと一斉に出て、夕方はずっと一斉に帰って来て、ほんとにすごかった。だけど一変シケになったらもう大変なところ、すぐ近くにおっても島は見えない。それで大分津久見の船が 3 人立ちの大きな突き船と一緒に付いておって、もう風が強くなって、島陰に廻って行ったら、島が見えないもんだから、島にのし上げてしまった。これで船員が落ちてしかれちゃった。もう向こうではそういう事故が殆んどですよ。

いや、僕らは、向こうの天気の子報だったら大体見て分かったもんねえ、この島のどこにどういった雲がかかると、どういうシケが起こるか大体分かったもん。それが分からないとダメですよ。向こうは風でもねえ、魚釣島の南の島陰に隠れていても、山頂に当たった吹き降ろしの風が来るんですよ、これがものすごく強いんで、時々生け簀の蓋を飛ばす場合がよくあったですよ、バアーンと。だから島陰でも、安心できない、よう自分で検討して、注意して廻らんといいかん。

尖閣 全部分かる 漁が少ない時 上がって廻った

尖閣は僕には忘れられないよ、向こうで金をうんと儲けさせてもらったから(笑い)。島の4つとも、あっちこっち上陸したよ。魚が少ない時は廻って見たりして、だから向こうは全然知らん所はない。一から全部分かるもん。クバシマにはヘビが多いということも分かる、やっぱり山の方は噴火の島だからねえ。大きな岩がごろごろしている。山の方にも上がった。あっちこっち皆見た。また北小島、南小島に鳥が多いよお、台湾連中は大きなカゴ背負って、卵採りに行って、向こうは崖だから、滑って落ちて亡くなった人もいたらしい。向こうの鳥は卵を拾ってカゴに入れて歩いても、後ろからまた卵は生んできているとねえ(笑い)。その位多かつたらしい。今もいるかなあ、あれから行ったことがないから分からん。

コウビトウ(黄尾嶼、久場島)では、ミズナギドリ、あれがねえ、普通の鳥とは違って、穴の中に卵を産むですねえ、僕らはそれを採るために上がっているから、穴の中に手を入れたら突付くんですよ。あれがものすごくいるんです。また、アオヅラカツオドリねえ、あれもいっぱいいるんですよ。コウビトウにはそればかりがすごかった。僕らが帰りにはそれ採ってきたもん。皮を剥いで家のお土産にした。



久場島の溶岩流の隙間、林内はオオミズナギトリの格好の住処となっている。(新納義馬 1980)

ニガナは美味しい 長崎まき網船の人も 採る

コウビトウには、ススキがいっぱいあってねえ。あれ、ススキがこんなに大きいのかと思って、茎齧って食べてみたら甘いんです。あれは昔の在来種のサトウキビでしたねえ(笑い)。芋づるもコウビトウにあるらしい。僕等はそこまでは気付かなかったけどねえ。根っこは出ないんだけど、葉っぱは大根のあのハマダイコン、それとニガナ(ホソバワダン)が向こうにいっぱいあったから、野菜代わりによく採って食べた。ニガナは美味しいから長崎県のまき網漁船の人達に採って上げたさあ。魚釣島からウエスト(西)の方に大体4時間走ればねえ、サバが湧くんですよ、ものすごく。あれを狙って長崎からまき網しに来ておったわけですよ。その前に僕が行った当時は、ここ(伊良部)からサバ釣に向こうに行っていたわけだが、それがあまり引き合わないからやめたんだけどねえ、で、長崎県から来てまき網をした人達は、漁で網を破ってきて、ここで修理して、また行くんです



魚釣島、久場島の岩場に自生するニガナ(ホソバワダン)、野菜代わりに重宝。(新納義馬 1979)

よ。僕は曳き纏って廻っているから呼ぶわけねえ。行ってみたらサバをねえ、マルサバをバケツのいっぱい貰ったから、これを捌いて、あのニガナを採ってきて混ぜて食べたら美味しいんだ。で、これを半分持って行って上げたんですよ。そしたら翌日も、また呼ぶから行ってみたらねえ、これはどこにありますか、と言うんだ。ああ、向こうにいっぱいあると教えて、行って一緒に採りましょうと行って、採って帰ったわけですよ。

魚釣島の掘割 船入れて 飲水採る

いろいろ何でもやってみたですわ。魚釣島ではねえ、一時、ここでクロキを庭に植えるのがこの島(伊良部)で流行っていて、魚を釣れん時には上から見て、ああ、あれがクロキだなあ、と、それ採りに行ったわけだ、ある時は、上がって見たらねえ、あれクロキじゃなくて、ここでも一時流行ったんだけど、何とかいう木か忘れたが、その木の葉っぱ、枝には、皆ヘビ(シュウダ?)がぶら下がっているわけだ。ヘビばかりだ。もうヘビがものすごく多いには驚いたねえ。魚釣島には水がありますよ、小さい川が。で、廻って行ってカツオ工場のある所には、小さい船が入れる所が造られてある、掘割ねえ。

僕はこの船で時々で入った。もう、波があるから向こうは流れも速いし、普通の人だと入れないですよ、波の起こり具合見ておって、ずっと走りながら艦の錨を下ろして走って行って、前の人が飛び降りてロープを持ってあっちこち縛ってねえ、島に上がって水採ってきた。また魚釣島の北側にも、小さな流れがありますよ、向こうでも時々水を採ってきた。向こうは水はあるから、食べ物はなくても、しばらくは大丈夫、暮らせるさあ。

アカオの頂上 草も 海鳥も 増えている？

僕は、去年アカオ(大正島)に行ってきた。ほら、国から補助があったでしょう、漁船が向こうで操業していて、中国船を見たら知らせると行って、外国漁船被害救済事業といったかねえ、それで漁船が何回か、こちらからも行っているわけだ。僕も乗せてもらって、1航海行ってきた。もう行きたくてしようがなかったから(笑い)。その時にアカオの写真を撮ってきた。この2枚の写真は漁協にも提供したがねえ。次は尖閣へ行く機会があれば、ぜひ行きたいねえ、尖閣に行って、こんなにした写真撮ろうかなあと思っている。

(撮ってきたアカオの写真を見せながら)、これは東から撮ったもので、潮が下がっている。あれはこっちから行く時の写真で北側から撮ったもの、2つ張り合わせたけど、干潮の時だから高くなっているねえ。アカオは大きな岩山になっているが、昔はロープで登ったよ。漢那の兄貴、一浩さんの兄さんが喜翁丸で行ってねえ、僕より歳下で、もう亡くなっているが、一緒に廻ったから、彼はどこにも登る人で、ロープ持って行って縛って、これを僕らは辿って、上に登って廻ってねえ。上の方は結構緑、木はないんだけど、草がある。

この前行った時は大部増えていたねえ、いや、当時は爆弾落としているから何もないさあ、(笑い)、けど今は大部草が生えているが、そんなに生えないと思うよ、海鳥も増えているから糞も多くなるさあねえ。漢那さんらと登った時に、小さいアホウドリ、あれを向こう

から採ってきてねえ、剥製にして家にあったけど、どこに行ったか分からない。

頂上に石囲い？ 岩山斜面 爆弾刺っている

(頂上指して) ここに、この辺に石囲いがある。いつ誰が造ったか知らんけどねえ、話によれば、日本の飛行機がここに落ちて、飛行士は助かったらしいけど、この人がやったのか分からない。だけど、ここは誰でも上がれんからねえ、よく分からん。

(下を指して)、アカオはねえ、ここの方にも入り江があるんですよ、いわば壕見たいな所があるんです、ここではエビも獲ったよ、電灯潜りもした、曳き縄も、もう自由だから、ここでもやったし、コウビトウでも、あっちこっちで皆やった。もう何でもやっていますよ。この漁してダメだったら、あの漁と。

(他を指して)、えっと、ここは真っ直ぐではないんですよねえ、ここここに少し入り江じゃないんだけど、船が着けられるような所はあるさあ、アカオに2箇所、これ少し曲がった所で上がった所ですよ。(岩山の斜面を指して)、こっち、この辺に爆弾が入っているんですよ。アメリカの演習にやったもの。恐らく誰も分からんだろう。この岩に、これに突き刺さっている。この前行った時にねえ、見ようと思って行ったんだけど、もう木が生えているから分からない。ここにあったもん、あの演習の時に、これ(模擬爆弾)で皆やっているんだけど、やっぱり皆怖いんだよねえ、バラバラして落ちるから、もう漁を止めてコウビトウに渡ったよ。あの頃は実際に向こうでも演習あるんだけど、コウビトウでやったのは見たことはないねえ。



大正島は洋上に突き出た岩礁の島、この周辺は黒潮が北に転じ潮の流れが速く魚の豊富な漁場である。(比嘉健次 1970)

アメリカはアカオだけで演習やっている。もう爆弾落とすとか、機銃を落とすとかして集中してやっている。実弾ではないさあ、模擬弾だから刺さっても爆発はしない。(笑い)、
だけど遠くから見ている、怖いから行かない。

南小島 子どもの墓あった？

あのう南小島のねえ、先の方にポツンと出た所がある。向こうには行ったことがないんだけど、昔の年寄り連中が言うには、向こうには大きなへビがいると言っていたなあ、中に洞窟があるらしい。また、南小島には向こうで亡くなった子供の墓碑があるような話もしていたよ。いや、最初の頃、向こうに鳥の羽根を採る時に、何人か住んでおったらしいよねえ、いわば、家族連れでおったらしいんだけど、子供も一緒に、子供の墓碑は、そこに小さな洞

窟(へびの洞窟とは異なる)があるさあ、向こうに子供の墓があるような話があったわけ、もう皆壊れてないですがねえ。もう子供は向こうの連中ですよ、内地の人か知らん。僕らが子供の時分に、こんな話を聞かされたねえ。誰が話していたか分からない、ここの人ではあるがもう昔の人だから。昔はここからも行っているだろうから、向こうに行って働いていた人かも知れんねえ。終戦後でもこのカツオ船の殆ど行ってますよ、ここの人も皆、向こうに行って、カツオを釣って、銘々でいい場所を見つけて、工場を造って、カツオ節造って、ナマリ節にして、それを持ち帰っているからねえ。

コウビトウ 貨物船難破 積荷盗り合戦

復帰前、1968年だったと思う。1000ト位の大きな貨物船がコウビトウ(黄尾嶼・久場島)で難破してねえ、あれはすごかったですねえ、日本から雑貨積んで台湾に行く船だったが、あの船は自動操舵していたもんだから、ちょっと居眠りした隙に、浅瀬にのし上げて、もう船底に穴が開いてねえ、荷物を積んである所はもう皆水浸しですよ。そこには色々な雑貨、なんでもかんでも積んでおったわけだ。それを台湾の突き船が、船長は久松の人だった、見つけて色んな品物を盗って、台湾にそのまま行ったらやられるからと船板を皆外して、ここに皆隠している最中に、僕らと出くわしてねえ、もうお互い顔見知りだから、赤玉ポートワインとか、クラゲの乾燥物とか、いろいろくれたんですよ。そして、向こうにこういう船が沈んでいるから、荷物いっぱいあるから、早く行って盗りなさいとねえ。それで行ってみたら、台湾のまぐろ船・延縄船が何腹もおったわけよ、もう彼等は一生懸命盗っている(笑い)。



久場島で座礁した貨物船基隆2号(800ト)の残骸、左に見える台湾人の解体労働者の小屋 (比嘉健次 1970)

僕らも行って銅パイプがねえ、3メートルの奴がいっぱいあったから、それだけ積んで帰って来た。ここに下ろして、また直ぐ引き返したんだ。面白いもんで、他人がやっている仕事は容易く見えるからねえ、大きな船が自分らも一緒に行こうと言ったきてねえ、だが、僕らの船は遅いから、早めに行きますと先に行つてねえ。あそこに着いたら、もう台湾船が皆盗って何も無い(笑い)。ダンプは穴が開いても水がいっぱい入っている。だが、底の方にエンジン、サバニに使う様なエンジンがいっぱいあった。それを台湾人は欲しがってねえ。もう農薬も一緒に積んであるから危険、赤やら青やらの農薬を、そこに潜って行ったんだよ。で、出てきたら、もうびっくり、赤やら青やらに全部染まっていますよ(笑い)、もうホントにすごかったねえ、台湾人は(笑い)。で、こっちから行った船はもう何にもないさあ、あとから来た大きな船ねえ、尖閣の海の怖さも知らんもんだから、コウビトウから3時間位走つたらねえ、ものすごい所がある。そこを知

らんで帰って行って、そこの波にやられて、船が裂けたわけだ(笑い)。もう大慌てて自分たちの着物として、それで穴を急いで塞いだりしてねえ、幸いカツオ船が帰りにこれを見つけて、引っ張って来たから助かった、こういうこともあったわけなんだよ。(台湾人がコウビトウで難破船を解体にしている写真を見せる)、そうそう、この船はあの時に座礁した船かもしれない。これが1970年に撮ったものなら、あの時が68年の頃だから、2年後ですねえ。僕らはねえ、この船があるから、海に油が流れるからねえ、コウビトウにはずっと行かなかったですよ。これは何年もダメだからといって行かなかった。だから、僕らはそこまでは見てないですねえ。もうその頃は、僕は南方のカツオ漁に行って、ここ(伊良部)には、いないからねえ。

港の計画場所 僕らの所へ 聞きにこい

(報告書を見て)この本には港を造る計画場所が2箇所ありますよねえ、これは大体あつちの状況を分かっていない。あんな所で造ってもどうにもならない。一番いいのは真ん中辺りにあるんですよ。僕は何年も向こうを専門にして廻っているから、あっちこっち皆上陸してみているから。だから僕らの所へ聞きに来いと、僕が言っているわけ(笑い)。



魚釣島西避難港(漁港)候補地 南北小島間避難港(漁港)及び漁船避難用係留浮標設置水域
(沖縄開発庁「尖閣諸島利用開発可能性調査編」1979年(昭和50)年10月)より

実際自分で船持ってあっちこっち避難してみないと分からないですよ。また、この島はこの風が吹けばどういうふうになる。ここまで分かっておかんと、これはどうにもならない。だから大分の津久見の突船見たいに行って島にのし上げている。

漁師たちは天候も見て、潮の流れも見て、避難をしているからねえ、だから、国が港を造る計画なら、僕らの所に聞きに来いと、僕が言っているんだよ、ほんとに(笑い)。

でも、ホントに港が出来たらいいねえ、僕らがそうした時分に話が出た時にやっておけばこんなことはない。西銘知事の時にねえ 川満伊良部町長がこの話は出したんだけど、避難港設置の請願をねえ、ちゃんと知事を通してやっていたけど ダメだった。あの当時造っておけば、今の問題は出なかったけどねえ。

(丁)

※参考資料 「豊丸」 遭難記事



(沖縄タイムス 1967.10.20)



(琉球新報 1967.10.24)

尖閣のカツオドリ 家族の一員だった 長崎 勝子 ながさき かつこ (82)

尖閣から主人が採ってきたカツオドリのヒナを養っていたんです。エサを上げてねえ、とても馴れて、子供たちも喜んで遊んでいたねえ。また外に遊びに行っても帰ってきて、漁から船が帰れば、浜行ってエサ食べて、ちゃんと家も分かっているから、またすぐ帰ってきて。だけど当時仲買さんたちがザルに魚入れてあっちこちに売っていたからねえ、前の方



尖閣諸島のカツオドリ

の広場で魚を売っているオバーの魚を盗んだらしい、ザルからねえ。そしたら、そのオバーが怒って、カツオドリを棒で殴って、怪我させてしまった。もう意地悪のオバーと怒ったけど、でもしばらくは生きていたけど、とうとう死んでしまった。もう子供たちは泣いて悲しんでいたよ。あのカツオドリは、遊んでいても、皆が長崎の鳥と知っているから持って来てくれた。自分でも家に帰ってくるし、海からも、また自分で浜に行つて漁からの船は帰るから魚をもらって食べていたからねえ。とてもかわいかったけど。

國吉 守夫 くによし もりお (伊良部漁協)

1929年(昭和4年)、宮古島伊良部町に生まれる。83歳(2012年時)。

南洋パラオから引揚げ、終戦直後は、台湾でカジキ、カツオ漁に従事し、尖閣海域に出漁した。昭和29年26歳には宮古に戻り、サバニ漁を皮切りに、宮古・八重山～尖閣海域で幅広く操業。尖閣諸島では、冬場の深海一本釣、シマガツオ漁を営む。また漁業先進県長崎で立延縄、底延縄やジャンボマグロ竿釣り漁法など修得・導入し、漁業技術の向上・発展、創意工夫に熱心である。それ故、年間水揚げは3千万円を超えることも多々あったという。



台湾突船で 尖閣へ 乗組員 皆こっちの人

南洋のパラオから高等1年で引揚げ、宮古に戻った。また台湾に疎開して、台湾で学校を卒業して、叔父の池間孝之助が基隆の南・蘇澳(すおう)でカジキ漁していたから、一緒に漁をして、漁師になったねえ(笑い)、で、台湾の突船に乗っておった。そのあと宮古に帰って、また台湾に行き、26歳(1954年)にはもう宮古に戻ってきたけど。

戦前台湾にいた頃は、カジキ獲りが専門ですよ。もうずっと台湾の突船に乗ってもうカジキ獲りをずっとしてきたから。乗組員は殆んどこっち(宮古の人)です。終戦後は宮古では船も仕事もないからねえ、台湾に渡って出稼ぎに行くしかなかった。佐良浜(伊良部の漁業集落)から行った人の殆んどが台湾の突船でしたねえ。上原金福さん、池原力三さん、池間忠一さん、仲間幸雄さん、糸満芳男さん達と一緒にいたですねえ。

漁場は、アジンコー(彭家嶼)と尖閣諸島で、アジンコーにカジキがいなければ、遠出して尖閣に行きましたよ、もうあっちにはカジキがいっぱいおったから。

僕も尖閣には何回も行きましたよ。台湾突船の船主は、呉禮さんで、船は呉榮丸という船だった。乗組員は佐良浜の上原金福さんと池原力三さん、池間忠一さんと与那国の川満さん、船長は池間孝之助叔父でしたねえ。

銚手もした 尖閣で カジキ 20本も

カジキは、北風の強いシケた時に出るから、南風には出ない。だから突船はもう北風なったら、シケたら出ます。船の表に突き出した突台に、面舵とり舵に2人立って、銚を持って立って構えておるから(笑い)。

カジキ見つけたら、もう船は全速力で追いかけて、銚を投げて突くさあ。僕は銚手もした。銚を投げたですよ(笑い)。カジキはもう一目散に、あっちに逃げたり、こっちに走ったり、もう舵を切るのが大変だった。海はシケて荒いし、もう全速力で走っているから(笑い)。

カジキはクロカワと、アカとシロと、それとバショウとあるけど、クバシマ(魚釣島)ではシロカワカジキがよく獲れる。シロカワはカタネとって、カタのヘリが動かない。またアカはマカジキのことで、台湾のアジンコー付近でよく獲れたけど、クバシマではクロカワとシロカワ、もうこれが沢山獲れた。

僕は、尖閣列島では20何本も獲ったよ。向こうにはもうカジキは多かったから。あとになって、宮古からは行った時はあまり獲れなかったですねえ。

カジキも ホンガツオも

戦前の台湾ではカツオはいくらあっても足りないですよ。カツオは台湾海岸から与那国近くまで来ていた。あの頃はものすごく獲れた。1回エサ投げて、釣り始めると船はもたない。もうあんまり釣って、船長があの時20だったから、若かったから分かんさあ。「もう早く止めなさい、止めんと、船が沈むよ！」と叫んだこともある(笑い)。その位釣れた。7、8^キ位のカツオが多く獲れたから。

カジキ突きでは、アジンコーは毎航海行ったねえ、アジンコーで獲れなければ、尖閣列島へ行くさあ。向こうへ行くと、カジキだけでなく、カツオも、ホンガツオも釣れたよ。もうあつちはとてもいい漁場だったねえ。だけど、戦後になって、本土の縄船が尖閣へ来てから、サバがいっぱいいるからと、あのサバ釣ってからねえ、サバは殆んどいなくなった。だからカジキは前のように寄り付かなくなった。

エサになる小さい魚まで獲ってしまったから。小さい魚に大きいのが寄ってきて食べるでしょう。それにカツオのエサになる魚もこの辺に来なくなって、もうカツオまでも寄り付かない、カツオも獲れなくなっている。皆もう余計獲り過ぎているからねえ。

船 幾つも持った 漁場 近海～尖閣

26歳(1954年)には、宮古に戻って、最初の頃はサバニから漁を始めた。

1ト位のサバニではせいぜい多良間付近までしか操業できなかった。そのあと2ト半の船を持ったので、夏にはアカオ(久場島、赤尾嶼)まで日帰りで行った。当時は氷がないから日帰りじゃないと、売って食べることはできない。

で、29歳(1957)頃には6トの大喜丸を購入して、尖閣列島に行って、シマガツオやアカマチ、シチューマチとかの底魚を獲りに行った。その大喜丸が尖閣で座礁したので、この船を捨てて、別の船に乗っていた。そのあと46歳(1974年)には、長崎から10トのファイバー船大喜丸、この船も名前を大喜丸にした、このファイバー船を買って、カツオやマグロ漁、底魚マチ漁をやりました。漁場は宮古近海から尖閣列島、与那国付近ですねえ。

また62歳(1990年)頃には、久高武さんの隆祥丸(16ト)を持って、カツオ漁とか、いろいろやりましたよ(笑い)。

尖閣 底魚 いっぱいおったよ

尖閣列島では、シマガツオも獲れたが、底魚もいっぱいおったですよ。アカマチ類も多かった。(海図で魚釣島と久場島の間を指しながら)、ここには大喜丸から行った時、このコウビトウ(久場島、黄尾嶼)から、2,3マイル離れた所にウキモロとって、アカバーともいうが、誰にも荒らされていないポイントがあるよ、そこではものすごく釣れた。マチ類が相当獲れ

たねえ。1日やってもう満船(笑い)。ここが一番釣れた。

クバシマ(魚釣島)の北の方、島の近い所にもいいポイントがあったが、潮が速くて釣機じやないと釣れない。手では絶対できないよ、オモリも大きく、魚が2,3本掛かったらとても、手繰りでは引き揚げられないねえ。もたもたしていたらダメ。ものすごく潮が強いんだから。(久場島付近を指して)、コウビトウのこっちにもいい漁場があった。水深73メートルだからこの辺かなあ、あまり深い所じゃない。浅い所があって、もういっぺんで食うもんだから、カンパチがものすごく獲れたよ。

一本釣 立て延縄 底延縄 何でもやった

クバシマ(魚釣島)付近での一本釣は、カツオと底魚、底魚は何でも釣れたよ。

割合多かったのはシチュウマチ、キンメダイだが、あれは立て延縄で釣れる。

長崎で立て延縄と底延縄を習ってきて、いろいろ試みた。あれはもう道具によるから。

底延縄は150メートル位の付けて、浮きを50位付けて流すんだが、この仕掛けを2つほど仕掛けて釣るんだが、いろいろやってみたねえ。

またシマガツオを獲る時は、流し釣でやって、アンカー入れたらなかなか潮が強いから、釣機がないとできない。流しにして、もうカツオは釣りだしたら早いからねえ。

シマガツオは沢山獲ったよ。エサをいっぱい積んで行くが残る場合もあった。少しのエサで3ト釣って、もう船いっぱい帰った時もあったねえ。

また、尖閣列島では底魚はマチ類が主ですよ。上原金福さん、本村の婿で名前忘れたなあ、伊志嶺ナカガマ？ 池間忠一さんなんかと一緒に行ったねえ。船は仲間武夫さんの「まんぷく丸」で。あの時は1日で1トあまりも獲った。だけど、魚は大漁すると安くてあまり売れなかったよ(笑い)。だけど、僕が底魚一本釣をやり始めた当時は、池間の人はよく獲っていたが、伊良部の人は少なかった、僕だけだったかもしれん。

座礁したり シケでやられたり

尖閣列島はいい漁場だけど、もうシケたら大変な所、何回も危険な目にあったよ。

いい天気にはしか行けんから。一回はもう、何回もだなあ、天気予報で3日間はいい天気というから出漁したら、もうお昼12時頃には荒れ出してねえ(笑い)。20メートルの大シケになって、波でブリッジの戸はぶち破られて、もう散々な目に遭った。大喜丸だったからよかった、助かった。ファイバー船で頑丈だったから。また、14~15メートルの大シケにあって、3,4日も帰れなくて、ナギてから帰ったがもう大変だったねえ。

一度は、尖閣で船なくしたよ(笑い)。クバシマ(魚釣島)に、ここの方に小さな瀬があるよ。(飛瀬付近か?)。そこでは魚がものすごく釣れるんだ。他の漁師達は行かない所で、そこで2時間ほど釣って、眠くなったから寝ていたわけさあ。浅い所なのでもう潮が変わって、船が回って、流れているのも分からん。飛び起きてどこにいるかと思ったら、船はクバシマに乗り上がっている、もうびっくりだ、機械をかけて、あれこれとやったが全然下りない。

どうにもならないから、無線で保安庁に助けを呼んださあ、座礁しているからと。

あの頃は無線電話があったからよかった。無線がない頃は大変だったねえ。

それで無線で保安庁に来てもらって乗せて行ったがねえ、沖縄の船も助けに来ておったけど。もう船は使えないから捨てましたよ(笑い)。

隆祥丸 台湾船を 救助

台湾漁船を隆祥丸で助けた時ことですか。もう忘れたよ。冬場にウブシュウ(シマガツオ)を釣りに行った時だが、クバシマ付近で操業しようとしていたら、北小島の方で台湾船が座礁していたよ。機関長や乗組員は誰だったか、思い出せないが、救助したからと保安庁から表彰を受けたよ。当時の新聞には、「1992年(平成4年)1月9日頃、台湾トロール漁船新志益(18ト)が大シケに遭い、北小島の北側リーフに座礁した。乗組員11名は大シケの海に飛び込み、10名は島にたどり着いたが1人は行方不明になった。事故から12時間後にカツオー一本釣船の隆祥丸(國吉守夫船長、16ト、乗組員6名)に救助された。隆祥丸は10日佐良浜港に到着、巡視船みやづきが遭難船員10名を平良港に搬送した。一方遭難現場では巡視船2隻とヘリコプターが出動して空海から搜索したが、遭難者の機関長は発見されなかった」とあったねえ。

年間水揚げ3千万円余「尖閣長者」

尖閣列島では相当儲けましたよ。何ト位水揚げしましたかって、あんなの(記録)つけないのに、3千万円あまりの水揚げは何回かあったよ。1カ年で、若い頃ねえ。

年間水揚げは3千万円余りだったのは、大喜丸を持つようになってから。

あの船が10ト位あったから、上等な船だった。小さい船の時は遠くまで行けない。1、2トの船ではせいぜい多良間付近まで。船が大きくなってから、尖閣に行くようになった。

(氏に「水揚げ3千万円余は、月収にすると2百50万円余の高額に上る、まさに『尖閣長者』ですねえ」と言ったら、笑顔で頷いた)。3千万円は、大喜丸持ったのが45、6歳だから、50代位までねえ。60才過ぎてから船は替えて、隆祥丸を持った。小さい船だが、あれからでも2千万円は揚げたこともある。ひと夏でもすごかった。この場合は尖閣ではないが、シビマグロを内地に千円で送った。

あの時も相当儲けたよ。漁師でも儲かる人もいるし、儲からない人もいるさあ(笑い)。

運もあるよ(笑い)。漁師は魚とジンプン(知恵)スーブ(勝負)なんだ。魚は寄る所に寄るから、この辺には魚はいない、この辺にはおる、もう廻って行って、いる所で獲らんとねえ(笑い)。それに潮もあるからねえ、潮が強かったらどうするか、どこに下ろしたら魚は獲れるかと、もうしょっちゅう考えんと、工夫しないといかん。

だから、僕は何でもやってきた。長崎に行って立て延縄とか、また底延縄とか、またジャンボといってマグロを釣る長竿があるさあ、内地の漁法をいろいろ習ってやりましたよ、いろいろやってきたからねえ。(了)

※「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告
—沖縄県漁業関係者に対する聞き取り調査— 2012年」(2013年刊)
「Ⅱ聞き取り編 2章 宮古島地区 伊良部漁協」より転載しました。